

新村 洋史 著

## 『大学生が変わる』を読む

山本 経天

本書は、著者がこれまで十五年間見つけてきた政府主導の構造改革の一環である大学改革を批判しており、その改革を主人公である大学生に焦点をあて、学生たちの内面から自己形成や発達を遂げる過程について興味深く考察し、「学生のための大学」の実現を大学改革への早道と提示した、きわめて重要な知見に満ちた力作である。

タイトルの『大学生が変わる』は、「単に『学力』や学ぶ力がひたすら低下しつづけているというような面を強調するものではない」（二頁）。むしろ我々大学教員に対し、「学生たちはまともな自己形成の道をたどっているし、たどることができる」ことを確信させると同時に、「社会の変化に伴う学生の変化を直視しながらその背景を探り、学生の自己形成に必要な不可欠な教養の修得に助力し」、「どこまで

も学生によりそって、苦楽を共にする」大学教員像の確立を訴えている（三三頁）。本書の構成は、次の通りである。

- 第一章 激変する学生像・大学像
- 第二章 学生が学習意欲を感じるるとき
- 第三章 青年・学生の自己形成を左右する社会・文化構造
- 第四章 自己形成論と教育論から見た「大学改革」政策の問題点
- 第五章 能力主義と学生の自己意識・学習観の動態
- 第六章 学習共同体と生きる力をはぐくむ教養教育の創造
- 第七章 自我と教養と主権者への自己形成をめざして

第一章から第四章までは最近の資料や調査研究をもとにした総論部分であり、

第五章から第七章までは各論的にそれぞれの問題を論じた部分である。全体的には著者の大学教員生活二十数年の教育研究と実践経験が統合された充実した内容であり、読みやすい工夫がなされている。各章の概要と主な知見について、以下に示してみよう。

第一章では、自我や人格の発達を中心に学生たちの現状を検討した。著者を委員長とする勤務大学の教養教育課程検討委員会での議論や自らの調査を文科省の調査報告と連動させ、現代日本における競争の社会・文化構造が「自己肯定感と未来展望をもてない大学生」を形成しており、大学教育においては学生に主権者意識を持たせる教養教育が欠落しているとする。これが「激変する学生像・大学像」の根本原因であると問題視している。

こうした環境のなかで、学生たちが自己形成と学びをどのように考え、どのような時に学習意欲を感じるのか、何に関心をもつのかを検討するのが、第二章である。具体的には二〇〇三年から三年間、著者が教えている大学での調査結果を析出した。それは、自己肯定感と未来展望

をもちにくくさせている社会の中にも学生たちは社会に役立てるための学びを求めているという現実である。

第三章では、国策としての「能力主義」社会への再編に左右される教育の社会的構造を分析した。最新の調査結果を利用し、自我形成を阻害する競争主義の教育・学校システムに対し、学生たちは直感的にこれを否定しながら実在的世界に向き合い、そこから自己を解放させていく過程を考察した。「大学はそうした生き方を学ぶ場であってほしい」、「学びの豊かさがあって、青年・学生もまた自己形成やアイデンティティの形成をとげていく。これじたいもまた教養の営みである」と著者が言う（一一三―一四頁）。この考えに沿い、第四章では、国策の一環として行われてきた大学改革は主人公である学生をどのように位置づけてきたかを検討した。政府答申の本質は「学生の側にたつて学生とともに生きるというまともな意味や文脈で、大学教育における学生の自己形成や教育論、教育実践のあり方を検討対象としたことはない」と著者は見ている（一一五頁）。

第五章では、学生たちが書いた自己史や学校体験に関するレポートや質問紙調査およびヒアリングなどから得た資料をもとに、学生たちの能力主義・学校歴社会に呪縛された一面と、それらの囚人になつている自己を解放したいという一面との葛藤が描かれ、重要な問題となつていくことを指摘している。この種の調査研究としては、その明確な視点と詳細な分析においてこれ以上のものはないほど充実かつ明快な論述となつている。「研究や教育・学習にじっくり落ち着いてとりくむことができなくなった」という大学改革の荒波のなかに身を置きながら、的確かつ辛抱強く調査研究を継続してきたことは、著者の大学教育研究への執念といえよう。

第六章では、「学習共同体づくりと主体的な学習・研究にとりくむことによつて、学生たちが教養の主人公に成長していくことを実践的に示した」（四頁）。一つの具体例を挙げ、学生の研究グループづくりから先行研究の検討やミーティングなど研究手法の伝え方、学生の発表内容を予め把握しておき、授業でのコメン

トの準備をしておくなどの技やノウハウを丁寧で紹介しており、教員になつて日の浅い私にとつて大いに勉強になつた。敢えて欲を言えば、このような事例をもつと紹介してほしい。

第七章では、「大学の授業をとおして学生たちが学び身につけたこと、民主的主権者としての学びや、『主体的認識』『課題的認識』を獲得していく姿を考察した。最後に、国際的水準の学力観・学習観について検討し」、日本の大学において「実現可能な課題であることを展望した」（四頁）。多難な大学改革に学生と教員の中にみられる希望の光をあてながら読者に深く考えさせてくれる結末である。

本書から学ぶべき点は多く、それゆえ大学教育改革の構想づくりに参加している政策担当者や大学教育の研究者のみならず、若手教員および教員を目指しているすべての者に是非一読されることをお勧めする。

（新日本出版社刊 二〇〇六年六月三十日発行 A5判 三三〇頁 本体価格二〇〇〇円）

中京女子大学・人文学部／やまもと・けいてん